東北関東大地震被災地医療支援　宮城班

報告書

【概略】

派遣目的：東北関東大地震被災地（亘理郡山元町、宮城病院周辺）の医療支援、被災地における医療保健の被災状況の情報収集を行い、被災者、医療従事者ニーズを分析する。滞在時に緊急疾患診療支援、感染症蔓延の防止、慢性疾患の増悪防止、被災者の定期服用薬剤の確保するためのシステムの構築。事前に情報収集した不足物品の搬送。

派遣期間：平成 23 年 3 月 17 日-20 日

派遣場所：宮城病院を滞在地、亘理郡山元町の医療支援

派遣メンバー：島田和明（医師）、朝倉義崇（医師）、上杉英夫（看護師）、久々湊由香子（看護師）、堀川真由弥（看護師）、福田一行（事務）、松崎幸一（事務）

派遣環境：山元町は三陸町とともに最後まで自治体への連絡が取れず、津波被害による被害甚大であった地域。電気、水道の回復、携帯電話の通話普及が 16 日まで行われなかった。宮城病院は診療体制が維持できず、外来は 2 名の医師、2-3 名の看護師による軽症に限った救急診療、320 名の病棟患者の診療の維持がやっとの状況であった。山元地区の避難所、救護所は 16 か所、1 か所で 3931 名が滞在（17 日時点）、開業医（松村先生）が 3 か所半日巡回するの程度、そのほかは医療支援の介入はまったく行われていない。非常に重要な時期に到着したと思われた。

隊員滞在環境：宮城病院の宿泊室 2 室提供、暖房あるも、気温の低下がひどくシュラフで就寝予定、食事は現地からのお世話にならないこと、ガソリンを自前に手確保する旨、院長に申し上げた。（実際は差し入れをいただいた。）

派遣業務：

- 仙台医療センター、宮城病院への必要物品の搬送。
- 宮城病院、医師会代表（松村クリニック院長）、保健センターとのミーティングを毎日朝夕行い、支援地の情報を収集し滞在期間の医療支援を行った。19 日以降は自衛隊、後続の長崎医療センターともミーティングを行い業務の引き継ぎを行なった。
- 2 班に分かれ 13-16 か所の避難所、1 か所の救護所の巡回診療（110-120 名/

日；患者診察)、各施設の代表者、保健師に感染予防の指導、消毒薬の配布した。特にインフルエンザ蔓延の兆候あり、隔離部屋の設置を各施設にお願いした。慢性疾患の内服薬の手配、処方、がん患者の不安対応（若干名）を行った。

- 17 日、18 日は宮城病院の医療者の負担軽減のため、医師、看護師が交代で夜間救急外来診療に参加した。(7-15 名）の診療を夜間行った。1 名小出血脳出血で緊急手術が必要な症例が発生、仙台医療センターに搬送、当隊の看護師が救急車に同乗した。
- 最終日には宮城病院、医師会代表、山元町役場（保健センター)、消防隊と問題点を議論、後続の自衛隊救護隊（医官 2 名)、長崎医療センター支援隊（医師 2 名）と報告活動、状況を説明し引き継ぎを行った。